

近年女性に急増している乳がんと子宮がん

～原因と予防～

○小松 淳子

(日本赤十字社医療センター 健康管理科)

昨今、日本においては“生涯において二人に一人はがんに罹患し、三人に一人ががんによって死亡する”と言われる時代になった。しかし、医療は日々進歩しており、がんに対する検査、治療等も新しいものが開発、導入されている。

ヘリコバクターピロリ菌による胃癌、B型、C型肝炎ウイルスによる肝臓癌、ヒトパピローマウイルスによる子宮頸癌等原因が明確に解明された癌種もあり、癌への対策は新たなステージに入ろうとしている。

がんの統計によると今後男性では前立腺がんが、また女性においては乳がんが多く罹患するとされている。ただし、両がんはがんの中では比較的予後が良好で検診等を定期的に受診することにより多くの場合、早期で発見される。現在、多くの検診施設で前立腺がんは PSA の測定、乳癌はマンモグラフィーまたは超音波検査が実施されるようになり早期発見できる環境は整いつつある。しかし、PSA 検査、マンモグラフィー(超音波検査)の受診率は決して高くはない。今後、受診率の向上をすすめることが大きな課題である。

今回の講演では、近年女性に急増している乳がんと子宮がんを取り上げて解説したい。

乳がんは、罹患者数が多いことまた好発年齢が他のがんと異なり 40～50 代であることが特徴である。乳がんは比較的予後が良好なケースが多いがんに属すが好発年齢が 40～50 代であるため、発症した場合社会的影響(家族等)が大きいケースが少なくない。しかし、治療においては分子標的薬がいち早く導入され非常に良い成績をおさめている。現在では、新規の分子標的薬も開発され治療の進歩は目覚ましい。患者数は増加しているものの死亡率を低下させるための臨床医の対応が期待される。

また、子宮がんにおいては特にヒトパピローマウイルスによる子宮頸がんが社会的に大きく取り上げられている。若年層へのワクチン接種等予防等が大き

な話題になっている。最近では、自治体レベルでの対応も進み、費用の面でも大きな負担にならない状況になってきた。今後、予防を進めることで罹患率の減少が大きく期待される。

これらの状況を踏まえ、両がんの概要、原因と予防について検診の立場からまとめたい。

資料請求先：03(3400)1311；院内 PHS 6611